

登録コード	A3417300	開講年度	2026				
授業科目	農村整備学				担当教員	内川 義行	
英文授業名	Rural Development					鈴木 純	
単位数	2	講義期間	後期	曜日・時限	木曜・2時限	対象学生	3年生
講義室	農学部15番講義室		授業形態	講義	遠隔授業科目		備考
信大コンピテンシー 該当							
(1)授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素				【授業の達成目標】		
	2022Aカリ, 2021Aカリ, 2020Aカリ, 2019Aカリ						
	【2022年度以前加付対象】専門的な知識や研究能力を修得している				農村整備に関する基礎的知識や研究能力を修得している		
	2026A3編(24A), 2025A3編(23A), 2024Aカリ, 2023Aカリ						
	【2024年度以前加付対象】専門的知識や研究能力を基礎としての確かな情報を収集・理解し、発信できる能力を修得している。				農村整備に関する基礎的知識や研究能力を基礎としての確かな情報を収集・理解し、発信できる能力を修得している。		
(2)授業で学べる「テーマ」	環境共生、防災減災						
(3)全学横断特別教育プログラム	ローカル・イノベーター養成コース、環境マインド実践人材養成コース、ストラテジー・デザイン人材養成コース、ライフクリエイター養成コース						
(4)授業の概要	国土の大部分を占める農山村地域は、食料の供給、国土の保全、自然環境の維持涵養等の機能を有している。これらの機能は、そこで生活し生産に従事する人々の手で維持されている。本講義は、農山村の多面的で公益的な機能を保持しながら、自然環境と調和し、快適に居住できる良好な農山村空間を形成するための、農村計画や農村整備技術について論じる。なお、本講義を学んだ後に、農村整備演習を受講することが望ましい。 また、担当教員は公務員・技術職の実務経験を活かして講義する。						
(5)授業計画	第1回 ガイダンス：農業農村工学と農村整備の原点・意義【内川】 ・農村の生産環境の整備【鈴木】 第2回 農地の構造と土壌、地形 第3回 農村の生産基盤(1) 水田 第4回 農業農村整備事業の実際(農水省の仕事：農水省職員による講義) 第5回 農村の生産基盤(2) 畑地、果樹園 第6回 かんがい(1)基礎 第7回 かんがい(2)畑地かんがい、水田灌漑 第8回 かんがい(3)施設 第9回 農地の保全と修復 第10回 農村の道路 ・農村の安全環境整備【内川】 第11回 災害と復旧 第12回 ハザードマップとリスクへの気づき現場知および東日本大震災 第13回 棚田集落での震災と復旧・復興 ・農村の生活環境整備【内川】 第14回 住環境 暮らしのあり方から 第15回 まとめ 最終レポート提示 授業アンケートの実施 第16回 最終レポート提出						
(6)自主学習の指針	講義内、教科書で紹介される引用文献等を確認し、内容を把握しておくこと。						
(7)成績評価の基準	各回の小レポートと最終レポートで評価する。 レポートは、()課題の背景・目的を説明でき、()課題への接近方法を適切に把握・実施しており、()結果について適正な処理とまとめができ、さらに()自らの見解を考察に既述できている。以上の()から()を満たしていれば「かなり上にある」。三項目までできていれば「やや上にある」。二項目までは「水準にある」とする。						
(8)事前事後学習の内容	講義内で紹介する配付資料や参考書に事前に目を通し、当日講義する内容を確認しておくこと。 また、講義終了後には、解説した内容をまとめ、学習を深めること。						
(9)テストやレポートの予定	各回終了時に小レポート、および最終レポートを課す。 1)講義内容の概要を理解した、2)示された現況の具体的課題を認識できた、3)これら課題に対して示された対応策について理解した、4)その上で自らの見解を提示できている、の全てが達せられている場合は「卓越している」、1)~3)の項目を満たしていれば「かなり上にある」、2項目までならば「ややうえにある」、1項目であれば「その水準にある」と評価する。						
(10)成績評価の方法	毎回の小レポートと最終レポートにより評価する(計100点)。						
(11)質問、相談への対応および連絡先	前半は鈴木研究室、後半は内川研究室で対応する。						

(12)履修上の注意	「農山村計画学」を事前に受講すること。
【教科書】	
【参考書】	吉田修一郎他編『農地環境工学 第3版』（文永堂出版） 木村和弘編著『棚田地域の震災復興』（農林統計出版） 農業農村工学ハンドブック（農業農村工学会）